

夜な夜な私に触れてくる息子

最後のお客さんを終えると瑞希みずきは後片付けを始めた。今年で五年目になるこの美容室もなんとか潰れずに持ちこたえている。

一人で切り盛りしているのだが、地元の人たちが来てくれるお陰で生活ができるのだ。本当にありがたい。

夫に先立たれて三年目になるが、当時中学三年生の一人息子を抱えて、これからどうしようかと泣いていたが、夫が遺してくれたこの美容室でなんとか食いつないでいるというのが正直なところだった。

お陰さまで地元のお客さんに愛されて、収入が途切れることはない。この調子ならなんとか息子を大学まで出してやれそうだ。もちろん安定はな

い。商売なんていつどうなるかわからない。大企業だって潰れることがある世の中だ。

吹けば飛ぶような小さな美容室なんて、いつ潰れるかわからないのだ。それでなくても美容室は数が多い。ウチが潰れたところでお客さんは困らない。別の店に行けばいいだけの話だ。自販機の数よりも多いのだ。

瑞希が美容室をやりたいと言いだしたとき、夫は反対せずに出資してくれた。自分の夢を叶えてくれた夫には本当に感謝していた。

今年で三十九歳になる彼女だが、始めるなら早い方がいいと言ってくれて、美容室をやらせてくれたのだ。恐らく夫の頭の中では、自分に万が一のことがあったときに、妻が仕事を持っていた方がいいと思ったのだと思う。

皮肉にもその備えが当たってしまい、夫は交通事故で帰らぬ人になって

しまったのだ。

三日間泣き続けたが、泣いてばかりもいられずに奮起して、もっとこの店を盛り上げようと夢中で頑張った。今ではなんとか貯金もでき、息子の達也^{たっや}を食べさせていける。すべて亡くなった夫のお陰だった。

その達也も最近では料理に興味を持ち、夕飯の支度をしてくれるようになったのだ。なんでも彼はユーチューブの動画を観ては料理を覚えて作っている。これが本当に美味しいのだ。ちよつとした我が家の料理人だ。

ある日、瑞希が疲れて帰ってきたときにカレーライスが作ってあった。きつとお腹を空かせていた達也は、母の帰りを待ちきれずに自分で作ったのだろう。

「カレー作ったよ」

と言ったときには信じられなかった。と同時に助かったと思った。これから晩御飯の支度をするのかと思うとげんなりだったのだ。

「これ、あんたが作ったの？」

「そうだよ。ユーチューブ見て真似して作ったんだ。結構いけるよ。食べてみてよ」

せっかくなので頂くことにした。一口食べたら、瑞希が作るカレーよりも美味しかったのだ。それには感動した。

それから彼は料理が好きになり、夕飯作りを担当してくれるようになったのだ。

「お母さん大丈夫だよ、夕飯ぐらい帰ってから作るから」

と瑞希入ったのだが、それに対して彼は言った。